

# 中国語母語話者の長音の生成 長音位置による難易度

児崎静佳 (こさき しずか) kshizuka212@hotmail.com

## 1. はじめに

日本語学習者にとって特殊拍の習得が困難であると言われているが、それは中国語母語話者(以下中国語話者とする)の場合も例外ではない。特殊拍の一つである長音に関しては発音の問題点が指摘されており(助川 1993)、知覚と生成の両側面から研究が行われているが、生成面においては十分な研究が行われているとは言いがたい。そこで、本稿では中国語話者にとって単語内のどの位置にある長音の生成が難しいのかを明らかにすることにした。先行研究において、英語話者の場合、難易度は[語中・語末・語頭]の順であり、語頭にある長音の生成が最も容易であるとされている(小熊 2001)。中国語話者の場合もこのような難易度の差があると推測されるが、それが学習者の母語によって異なるのかどうかは不明であるため、中国語話者の場合を検証したいと考える。

## 2. 調査概要

調査協力者は、中国東北3省(遼寧省・吉林省・黒龍江省)出身の北方方言話者、漢族35名である。遼寧省にある大学の日本語学科に在籍しており、全員大学入学後に日本語学習を開始した者であり、来日経験や所属校以外での日本語学習経験はない。

調査語は「ふーかく(風格) くつーな(苦痛な) かいふー(開封)」のように4拍からなる有意味語30語で、内訳は語頭(2拍目)に長音がある単語が9語、語中(3拍目)が9語、語末(4拍目)が12語である。調査語は小熊(2001)を参考にし、長音位置とアクセント型を考慮している。母音はウ段、エ段、オ段のみとし、長音以外の特殊拍を含まない直音からなる単語を選定している。

調査方法は以下の例のような単語カードを提示して読み上げてもらいSONY製DAT(TCD-D100)に録音した。アクセント表記は中国で使用されることの多い番号式で示し、協力者が理解しやすいように努めた。また、調査語に有意味語を使用するため、その単語を知っているかどうかが生に影響する可能性も考えられるため、既知語の確認を録音後に行った。

調査語の提示例：

〇 風 格 ふーかく
---------------

判定方法：風格の場合：ふー \_\_\_ が \_\_\_ く \_\_\_

発音の判定は、まず筆者を含む日本語教育経験のある日本語母語話者5名で全音声データの一部(6%弱)を判定し、一致率を求めた。筆者と各判定者との一致率が平均91.1%と高いことを確認した後、筆者一人で判定を行った。判定方法は、上記のように調査語の短音部分のみをタイプし、聞こえた音を聞こえた箇所に書き込む方法である。判定の結果、当該長音が長音として聴取されているものを正用、長音として聴取されなかったものを誤用とした。なお、清濁の混同、アクセントの正誤は判定対象外とした。

### 3. 結果と考察

協力者ごとに各位置別の正用率を算出した後、反復測定分散分析を使って、語頭・語中・語末の正用率を比較した結果、5%水準で有意差が確認された ( $F(2,68)=23.695, p<.05$ )。次に、対応のあるサンプルの t 検定を行って差がどこにあるのかを確認したところ、有意差は語頭と語末間 ( $t(34)=5.327, p<.05$ )、語中と語末間 ( $t(34)=4.894, p<.05$ ) で、ともに 5% 水準で確認され、語頭と語中間では確認されなかった ( $t(34)=1.617, p=.115$ )。したがって、長音の位置による生成の難易度は、語頭と語中に比べ語末が難しいという結果であった。

表 1 位置別の正用率の平均と標準偏差

	平均 (%)	標準偏差	min	max
語頭	95.2	7.3	77.8	100
語中	92.1	12.2	44.4	100
語末	73.6	24.4	16.7	100

中国語（北京語）には音節の長短が意味の弁別には機能しておらず、長母音と短母音の対立は存在しない。語末に位置する音節の長短に関して、中国語教育に関する文献や先行研究において、その根拠となる実証的な記述は見当たらないため、母語干渉であるかどうかは、母語による発話を検証する必要がある。ただし、知覚においても語末の長音の知覚が困難であることが先行研究で明らかになっていることから（皆川 1997）、中国語話者にとって生成と知覚の両面において語末が困難点となっているといえる。

また、有意味語の影響であるが、単語の既知率と正用率の間に相関関係は認められなかったため、今回の調査では調査語を知っているかどうかは長音の生成に影響した可能性はないと考えられる。

英語話者を対象とした先行研究の結果と比較すると、中国語話者も英語話者も語頭に位置する長音の生成が最も容易であるという点では共通しているが、語中と語末の順番は逆転しており、学習者の母語によって難易順には違いがみられる。これは、長音の習得が困難であることは学習者の母語に関わらず見られる普遍的な問題であるが、長音の位置という点では母語によって難易の特徴が異なるということになる。したがって、一口に学習者にとって長音の習得が困難であるといっても、それぞれの母語話者がもつ難易の特徴は一樣ではないといえよう。

### 4. 今後の課題

今回は発音判定において母語話者間の一致率を測定する方法をとった。今後は判定者数を増やして客観性を高めたい。協力者や単語によってはアクセントが正しく生成されないこともあったため分析対象外としたが日本語母語話者の長音の知覚にはアクセントが影響しているとも言われている。アクセント型の正誤が長音の知覚に及ぼす影響についても探ってみたい。

## 参考文献

- 小熊利江 (2001) 「日本語学習者の長音の産出に関する習得研究—長音位置の要因による難易度と習得順序」『日本語教育』109, 110-117
- 助川泰彦 (1993) 「母語別に見た発音の傾向—アンケート調査の結果から—」『日本語音声の研究と日本語教育』, 187-222
- 皆川泰代 (1997) 「長音・短音の識別におけるアクセント型と音節位置の要因—韓国・タイ・中国・英・西語母語話者の場合—」『平成9年度日本語教育学会春季大会研究発表論集』, 123-128